

# 論文の和文要旨

氏名 安則 貴香

## (博士論文の題目)

ドイツにおける新体操促進運動 (Gymnastikbewegung) に関する  
史的研究 (1901 年-1933 年)

ードイツ体操連合 (Deutscher Gymnastik-Bund) の設立と活動の実際に着目してー

## (博士論文の要旨)

本研究は、新体操促進運動を牽引した体操家、舞踊家、音楽家からなる体操諸流派が一堂に会して 1925 年設立されたドイツ体操連合に着目し、ドイツ体操連合が結成に至る経緯、組織の理念と活動の全容、および、そのなかで構築された体操の実態を明らかにするものであった。本論で検討した結果を整理すると、以下のようにまとめられる。

1. ドイツ国民体育と称されるトゥルネンは、1811 年 7 月にプラマン学校で教師を務めていたヤーンを中心にベルリン郊外のハーゼンハイデで産声をあげた。ヤーンが提唱・実践したトゥルネンは、祖国愛に燃え、共同体の精神に目覚めた、意志強固で身体強健な青少年を養成する手段であり、ドイツ各地でクラブ組織が結成され、自主的な社会体育活動として広域に根付いていった。しかしながら、国家統一、身分制度の撤廃、多面的で調和的な人間形成という政治的、教育的な色彩を帯びながら展開されたことにより、1820 年 6 月に「トゥルネン禁止令」が発布され、活動が縮小していった。
2. 1830 年代に入り、トゥルネンが工場労働力や軍事力の強化を目的とする国民教育として定着していくと、1842 年にトゥルネン禁止令は解除され、このなかでヤーンのトゥルネンは、集団による徒手体操と手具体操を基礎とする集団秩序運動へと変容した。学校体育を軍事体育と捉え、そのなかに集団秩序運動を位置づけていったシュピーースの集団秩序運動は、規律と秩序による人格の陶冶を目的とするもので、胴体と手足の各部位を分節化し、それらを組み合わせて一連の運動へと再編していく「要素化」、および、一つの運動の細部にまで厳格な規定を施す「鋳型化」を特色とした。
3. シュピーースと同様に学校体育を軍事体育と捉えたマウルは、年齢、性別、身体能力などに応じて授業を系統化し、集団秩序運動に関わる 5 段階の指導法を確立した。1870 年代に入り、小学校の一教科として体育が採用されると、シュピーース=マウル方式の集団秩序運動は、軍事力の増強が図られた第一次世界大戦期まで、学校体育の主流を形成していった。その一方で 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、イギリス産のスポーツ、自然科学の知見を組み込んだ北欧体操が伝播し、また女性の身体機能の向上を目指す取

## 様式 12 号

- り組みの重要性が強調されると、その余波は集団秩序運動に及んでいった。
4. 1871 年にドイツ帝国が成立し、経済の発展と国力の増強が進んでいくと、学校教育は総じて教師中心の硬直化した授業に覆われていった。この状況に異議を唱えたのが、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて興隆したドイツ新教育運動であった。そのなかで、子どもの自発的活動を重視し、子どもの生と生活の充実を図ることを目的として、創造的で感性的な美術、手芸、作文、音楽といった教育に重きを置いた芸術教育運動は、1896 年にハンブルグで開催された芸術教育保護のための教員集会で組織化され、その後の 3 回にわたる芸術教育会議を経て、ドイツ各地へ拡大していった。
  5. 全ての芸術教育会議で中心的な役割を担ったリヒトヴァルクは、音楽との関わりをとおした新しい体操により、創造的で感性的な教育が実現されるとの考えに基づき、1905 年に開催された「第 3 回芸術教育会議」のテーマを「音楽と体操」に設定した。第 3 回芸術教育会議の内容は、シュピース＝マウル方式の集団秩序運動にたいして、生理学や解剖学の知見を素地とする美的で身体のバランスを考慮した運動、トゥルネンに創造性を加える自然法則に従った運動など、新しい運動認識に基づいた体育の在り方を指示するものであった。音楽との関わりをとおした具体例は僅かに過ぎなかったが、学校体育の改革に向けた画期的な試みであった。
  6. 第 3 回芸術会議を契機として、人間性の問い直しを基本的な観念とする新体操促進運動が胎動し、体操家、音楽家、舞踊家からなる体操諸流派により、新たな理論と方法に基づく体操の構築が進められた。体操諸流派の活動は、トゥルネンや古典バレエで見過ごされてきた、弛緩、リズム、表現といった身体運動の要素を浮かび上がらせるところとなり、1922 年に開催された「芸術体操会議」の助走路となった。芸術体操会議は自然に即した表現形式、音楽との融合を目指した身体教育の事例を豊富に示し、新しい身体活動領域としての体操がリズム、音楽と結びついた人間の基本的運動として、教育、芸術、医学の広範な分野に周知される役割を果たした。
  7. 芸術体操会議を契機として、1925 年に「体操のための本部事務局」が設置され、これを発展させるかたちで、体操諸流派の明確な組織団体である「ドイツ体操連合」が 1925 年 11 月に設立された。ドイツ体操連合の設立目的は、体操の実践者を精神的、かつ、知性的な主体として捉えながら、体操の普及・促進・保護に努めることにあり、体操をとおした身体教育に関する知識の追及と啓発に向けて、機関誌『ジムナスティック』を発行した。ドイツ体操連合の会員や所属する体操学校の数は、設立以降より増加の一途を辿り、諸処の活動を軌道に乗せていった。
  8. ドイツ体操連合に所属した体操学校の教育内容は、生理学や解剖学を主要教科に位置づけ、教育学、心理学、体操・舞踊・芸術史なども網羅していた。また音楽関連の授業については、音楽理論、音楽史、ピアノ、和声学、楽器伴奏などが実施されており、その他についてもダンスや振付など、多岐にわたっており、これは体操が芸術的な側面と深く接続していたことを如実に示すものであった。ドイツ体操連合は、ドイツ国内の体

## 様式 12 号

操教育に関する規制が曖昧であったことを理由として、1927 年に「一般人向け授業と職業養成専門教育のための要綱」を作成し、所属する体操学校の価値を高め、営利目的で運営されていた体操学校との差別化を図った。

9. ドイツ体操連合は、2 回の体操専門会議である 1926 年の「新体操教育会議」、1931 年の「人間教育としての体操会議」、3 回にわたる女子体操教科課程講習会を開催した。新体操教育会議では、集団秩序運動を主とするトゥルネンとは異なる、自由でリズムカルな運動と表現が提示された。女子体操教科課程講習会では、生理学や解剖学の知見に基づいた簡単な動きによる振動運動、動きから空間と速度を意識した運動、呼吸を意識した緊張緩和の運動、音楽のリズムにのせた運動が取り上げられ、これらは身体の内面に意識を向けることを共通の運動認識としていた。人間教育としての体操会議は、精神性を涵養する手段として体操が捉えられるばかりであったが、同時期においてドイツ体操連合の設立に携わった会員の脱退が頻繁に発生したことは、転換に迫られていたドイツ体操連合の実状を浮き彫りにするものであった。
10. 1933 年にナチスの党首であるヒトラーが政権に就くと、ドイツ体操連合は、「体操とダンスのための職能同盟」へ統合された。ドイツ体操連合の理事長職にあったヒルカーは、ドイツ体操連合で普及・促進した体操を「ドイツ体操」と命名した。ナチスは、ドイツ体操連合の体操の理念や具体的な活動を継承しつつ、ドイツ国家の建設とドイツ民族アイデンティティの構築に向けた身体教育として「ドイツ体操」を教育学の領域に取り込んだ。しかしながら、ナチス教員同盟の「ドイツトゥルネン・スポーツと体操教員帝国同盟」の専門団体「体操とダンス」の指揮下に置かれると、『ジムナスティック』は 1933 年 11・12 月号を以て廃刊となった。
11. ドイツ体操連合が普及・促進した体操の詳細を明らかにするために、『ジムナスティック』に掲載された寄稿論文に注目したところ、教育現場や医療現場に従事する会員、執筆活動に専念する評論家を論陣の中心とし、その内容は、体操に関わる運動認識や運動法則の啓発、体操の医学療法への転用・応用、教育実践の具体例など、多岐にわたっていた。これらから認められる体操の運動形成を整理すると、空間の高低、前後、左右からなる 3 次元の動きを基礎とした運動形成、動きとリズム、メロディーを融合させた運動形成とに大別された。従前の体操研究で見過ごされた後者の具体的な指導実践例として、ギュンターとメダウの内容が『ジムナスティック』から明らかになった。
12. オルフのシュールベルクによる音楽の基礎練習を前提としたリズム体験、メロディー体験に注目したギュンターによる音楽と動きの統一とは、身体に刻まれたリズムが次第に動きに変換されると同時に、呼吸と一体化してメロディーに構成され、拍手や呼吸に歌が加わることによって、運動から音楽が導かれ、全身運動へ転化されていくというものであった。楽器を扱うためには身体感覚が重要であると考えていたギュンターは、楽器を奏でるテクニックそのものが運動機能に基づくという理由から、ハンドドラムやティンパニーをはじめとする原始的な楽器に注目して、動き、リズム、メロディーの融合

## 様式 12 号

を図った。その一方でメダウは、動きの基準となる音楽の表現形式を運動教育に組み込む必要性を強調し、動きから発せられる言葉をメロディーに置き換え、そのメロディーに合わせた動きを導く指導方法を提示した。動き、リズム、メロディーを融合させた運動形成にたいする両者の基本姿勢は、動き、リズム、メロディーのいずれを主体とするかで異なっていたが、ともに即興で動きを導くことを重視していた。即興による身体運動は、身体の内面に意識を向け、心理的な抑制からの解放を可能とし、身体運動の総合的な能力の向上に連なるものであった。

13. 体操専門会議と女子体操教科課程講習会の内容、『ジムナスティック』の寄稿論文を勘案したところ、ドイツ体操連合が普及・促進した体操の特色は、身体の内面を意識する運動であり、空間を意識した即興によって動きを探究・発展させ、身体の実現能力を高めるものであった。また、ギュンターとメダウの指導実践は、運動と音楽を融合させた教育方法に基づくものであったが、従来の学校体育において、音楽を取り入れた教育が実施されていなかった事実を鑑みるならば、運動と音楽の融合は、ドイツ体操連合が普及・促進した体操のもう一つの特色であった。
14. ドイツ体操連合が普及・促進した体操は、芸術教育運動を遡行するものであり、実際のところ、芸術教育運動の理念にある、子どもを主体に位置づけた創造的で感性的な教育は、3回にわたる女子体操教科課程講習会における体操の授業実践で鮮明にあらわれていた。これはドイツ体操連合が普及・促進した体操が、子どもの表現能力を最大限に引き出すために、教育現場で十分に活用可能であることを示すものであった。ドイツ体操連合は芸術教育運動を基盤に、身体の内面的機能の重視し、空間を意識した即興による体操、運動と音楽を融合した体操を体操専門会議と女子体操教科課程講習会で具現化し、『ジムナスティック』をとおして社会に周知させていった。しかし、人間教育のための会議以降、ドイツ体操連合による大々的な行事は開催されず、1933年にドイツ体操連合は、ナチスの傘下に収められていった。
15. シュピース=マウル方式の「鋳型化」と「要素化」による集団秩序運動に異を唱え、新しい運動認識に基づく体操を迫及した体操諸流派の活動を支柱とする新体操促進運動において、ドイツ体操連合は象徴的な存在であった。体操専門会議と女子体操教科課程講習会の開催、機関誌『ジムナスティック』の発行をとおして、ドイツ体操連合が集団秩序運動に代わって構築した体操の特色は、身体の内面を意識すること、空間を意識した即興による動きを展開させること、動きとリズム、メロディーといった運動と音楽を融合させ、即興で動きを導きながら表現能力を高めることにある。ドイツ体操連合が構築した体操は、新体操促進運動が主軸に据えた、個性を重視する創造的で感性的な教育のエッセンスを集約するものであった。